

赤松大三郎則良の蘭学及び英学修養

小野澤 隆

こども健康学科

Dutch and English Studies of Akamatsu Daizaburo Noriyoshi

Takashi ONOZAWA

要 旨

赤松大三郎則良（1841-1920）は幕府と明治政府に仕え、造船学の基礎を築き、海軍創設等に尽力し、日本の近代化に貢献した人物である。本稿では、赤松大三郎則良の蕃所調所、長崎海軍伝習所、米国渡航、オランダ留学の経験を探るなかで蘭学及び英学修養の一端を明らかにした。幕末・維新时期は蘭学から英学への移行期であり、則良はまさにその時代に直面したのであるが、蘭学をないがしろにするのではなく、それを土台として英学にも取組んでいった。則良のこうした経験は、外国語学習において、母語及び基礎学力がいかに重要であるか、文法及び反復練習が欠かせないことなどを改めて示唆している。

キーワード：赤松大三郎則良、蘭学、英学、外国語学習

Abstract

Akamatsu Daizaburo Noriyoshi (1841-1920) served the Tokugawa Shogunate and the Meiji Government, contributing significantly to the modernization of Japan as to the foundation of shipbuilding, the establishment of the navy and so on. This paper clarified a part of Noriyoshi's Dutch and English Studies while exploring the experiences of his Bansho-shirabesho (National Institute of Foreign Languages), Nagasaki Kaigun Denshujyo (Nagasaki Naval Academy), shipping to the USA, and studying abroad in the Netherlands. The end of the Tokugawa and the beginning of the Meiji era was a transitional period from Dutch to English Studies. Noriyoshi faced that period, but he worked on both Dutch and English Studies. Noriyoshi's experiences reminds us how important the mother tongue and basic academic ability are in learning a foreign language and that grammar and repetitive practices are indispensable.

Keywords : Akamatsu Daizaburo Noriyoshi, Dutch and English Studies, Foreign Language Learning.

1. はじめに

赤松大三郎則良（以下、則良と記す）を一言であらわすのは難しい。則良については、則良の長女、登志子が森鷗外の最初の妻であったことで、しばしば取りざたされるが、近代海軍創設者、造船学の父、政治家、実業家等、様々な顔を持っている。こうした実績をまとめるならば、幕末・維新の近代化の先覚者であったことは間違いない。

本稿では、これまであまり取り上げられていない則良の経歴の礎となった蘭学及び英学修養について探っていく。資料として主に赤松範一編注『赤松則良半生談－幕末オランダ留学の記録』¹⁾を活用し、その中で則良の蘭学及び英学修養に関する事項を検討する。現在の英語教育問題にも示唆を与える側面があると思われる。

2. 則良の蘭学・英学関係略歴

則良は幕末から明治にかけて、幕府と明治政府に関わり様々な分野で活動した。以下は、その活動の原動力になったと考えられる蘭学・英学関係に係る事項を挙げてみる。²⁾

年次	歳	出来事
1841 (天保 12) 年	0	幕臣、吉澤雄之進の次男として江戸に生まれる。
1847 (弘化 4) 年	6	実祖父、赤松良則の養子となる。
1854 (安政元) 年	13	下田奉行与力となった父に伴い、下田に滞在する。
1856 (安政 3) 年	15	江戸に帰り、坪井信良に蘭学を学ぶ。
1857 (安政 4) 年	16	蕃書調所句読教授方出役となる(1月)。長崎海軍伝習所伝習生とし海軍諸術を学ぶ(10月)。
1859 (安政 6) 年	18	海軍伝習所の閉鎖に伴い江戸に戻る。軍艦操練所教授方手伝出役となる。
1860 (万延元) 年	19	遣米使節に伴い威臨丸にて出航する(1月)。帰国(5月)後、再び軍艦操練伝習所出役となる。
1862 (文久 2) 年	21	オランダに留学する。
1868 (慶應 4) 年	27	オランダから帰国する。
1869 (明治 2) 年	28	沼津兵学校頭取となる。
1870 (明治 3) 年	29	海軍兵学寮大教授となる。
1920 (大正 9) 年	79	逝去する。

この略歴をもとに則良の蘭学・英学の関連について簡単に触れてみたい。則良が幼少の頃であるが、父、雄之進は幕府御徒士であった。1843年(天保4年)に雄之進は長崎奉行与力となり、則良は弱冠2歳であったが、長崎に赴くことになった。3年間同地で過ごしたわけであるが、幼少のため記憶は無く、西洋との窓口であった長崎という環境とはいえ、その後の則良に重要な影響を与えたとは考えにくい。

則良は6歳のとき長崎から江戸に戻り、基本的な読み・書き・そろばんを本格的に学ぶことになる。当時、普通の子供が受けた教育であり、特別に早くからオランダ語

の勉強をしていたわけではなかった。しかし、則良は読み・書き・そろばんを習熟する中で、大切な思考の土台を築くとともに豊かな感性を育むことができ、蘭学・英学を受容するうえで重要な基盤を築くことができたと推測する。

1853年(嘉永6年)、ペリーの浦賀来航の件で雄之進は米国人の対応に奔走していた。翌年1854年(安政元年)、日米和親条約が締結されたことによって、長崎に加え下田と函館の2港が開港され、下田奉行、伊澤美作守に随行して下田に滞在することになった。このとき、則良は父の勧めで同行し、一年半ほど下田で過ごしたのであるが、父の任務を間接的ではあるが垣間見ること、米国人との折衝において言語の壁に気づき、英語の必要性を痛感していたに違いない。しかし、実際には幕府の通詞は米国人と英語で交渉を行っていたわけではなく主にオランダ語を介して意思の疎通をしていたため、則良はオランダ語も依然として重要であるとの意識も持っていたと考えられる。オランダ通詞であり、また当時としては、相当な英語力があつた森山栄之助と堀達之助が通詞の任にあたっていたのであるが、彼らもまた大かたはオランダ語を使っていたのである。堀達之助が“I can speak Dutch.”とペリーが乗船する艦隊に言葉を発したのは、そのことを象徴する出来事である。³⁾

則良は1855年(安政2年)に江戸に戻り、坪井信良の蘭学塾に入門するのであるが、まだ英語を学ぶところがほとんどなかったという事情があったためである。1808年(文化5年)のフェートン号事件を機に、オランダ通詞の英語兼修が始まったが、オランダ通詞たちは英語を学ぶ過程でオランダ語との共通点を次第に認識し、英語習得においてオランダ語を熟知していることは有益であると実感していた。従って則良が意識していたかどうかは分からないが、オランダ語に取組んだことは決して無駄ではなかったと言えよう。後で触れるが、則良の英語の習得が速やかに進んでいたのはオランダ語に習熟していたことも大きな要因であろう。

ところで江戸後期から盛んになった蘭学は、その中心は天文学、医学、本草学であったが、さらに時代が下るにつれ軍事関係に移っていった。言うまでもなく19世紀以降、西欧列強がアフリカ及びアジアを植民地化し、日本にもいよいよ侵出し開国を迫ってきたことによる。信良は蘭方医であったので、そこで学んでいた塾生は医学を志す者が多かったが、則良の場合はオランダ語の習得が第一の目的であった。

蘭学修養においては、一般的に文法から始まり内容把握へと進んでいったようである。そしてさらに重要なことは、オランダ語の習得によって窮理すなわち西洋の自然科学を解することが求められていたということである。則良が海軍や造船に関わっていた経歴からすると、オランダ語に習熟してただけでなく、西洋の自然科学一般に関心が高く、またその分野に秀でていたと考えられる。

1856年（安政3年）に幕府は蕃書調所を設置すると、その翌年、蘭学に心得がある者として則良が教育担当の一人として選ばれた。辞令に「句読師の儀向後蕃書調所句読教授出役と相唱へ都て外場所出役並の通相心得候様」⁴⁾とあるように、オランダ語を本格的に学び始めて2年程度であったが、オランダ語を指導する立場となり、その上達の速さが伺われる。

こうして蕃書調所の句読教授出役に就いたのであるが、すぐさま長崎海軍伝習所でオランダ人の下で海軍について学ぶことを命じられ長崎に赴くことになった。幕府は国防のために海軍創設の準備を急務としていたからに他ならない。

当時、蘭学修養をしていた人たちの年代は幅広く、多くは二十代から四十代であったが、則良はすでに十代に着々と蘭学修養の基礎を積み上げてきた貴重な人材であったばかりでなく、極めて能力が高かったと言えよう。しかしながら則良が蕃書調所出役及び海軍伝習所伝習生になったころは、時代は水面下において蘭学から英学へと肅々と舵を切り始めていた。例えば当時を代表する洋学者であった西周は1856年（安政3年）に中浜万次郎からすでに英語を学び始めている。また明治の外交官であった薩摩藩士、上野景範もこのころ蘭学から英学に転じている。1854年（安政元年）の日米和親条約から1858年（安政5年）の通商条約が締結された経緯から明らかのように米国の影響がより一層高まっていたからである。確かに則良は坪井信良から真摯に蘭学を学んでいたが、英学修養への思いも温めていたはずである。則良の蘭学及び英学修養については、以下の章で詳しく見ていくことにする。

3. 蕃書調所及び長崎海軍伝習所での蘭学修養

1857年（安政4年）に則良は蕃書調所教授方出役となるや、すぐさま長崎海軍伝習所伝習生に命じられたのであるが、まずは蕃書調所での蘭学修養について見ていきたい。同所は1856年（安政3年）に幕府によって江戸に創設され、西洋学研究及び教育の最高機関であったが、その内容は主として蘭学であり、目的は以下のとおりである。⁵⁾

彼を知を急務と相心得、各国之強弱虚実、水陸軍之模様、器械之利鈍等、差向実用之廉々、研究乃上、彼之長を取り、其短を採置…砲術の書、砲台築立方並築城の書、軍艦製造並取廻方の書、航海測量の書、水陸練兵の書、器械の書、国々の虚実を記し候書…蘭学稽古所も補理いたし置…

このようにオランダ語の書物を翻訳・研究し、また通訳者を養成することであった。しかし、1860年（万延元年）になると同所において英語が正式科目として教授

されるようになった。米国との関係から必然的な成り行きである。英学の必要性を痛感していた幕府は、高嶋太郎を英学句読教授出役に、堀達之助を教授手伝に任命した。創設当初の蘭学研究一辺倒から国際情勢の変化に伴い英学重視に移行し、さらに仏学、独逸学も研究対象になっていった。

また、蘭学の初期は医学が主要な対象であったが、次第に軍事等にとって代わられたことはすでに述べたが、英学研究においても同様であった。蕃書調所が、当時日本が置かれた状況から軍事、外交に関する翻訳・研究、並びに通訳の養成に軸を移していったのは当然のことであった。

さて、蕃書調所の具体的な研究・教育内容について触れてみたい。「蕃書調所規則覚書」の授業規則は以下のとおりである。⁶⁾

- 会読輪講、素読稽古は朝五ツ時（午前八時）より夕七ツ時（午後四時）まで。但正月十一日稽古始、十二月二十日納之事
- 五節句八朔並七月十三日より十六日迄休之事

オランダ語入門書の『ガランマチカ』（文法書）と『セイタキス』（文章論）を使って、初めに文法を学び、素読を練習し、次第に翻訳に入っていく教授法であり、江戸時代後期の蘭学修養において一般的な方法がここでも行われていたことになる。⁷⁾則良が蕃書調所句読教授方出役として任に当たるのであるが、オランダ語の素読がかなりの水準に達していた証である。句読教授とは、主に入門期の者に素読の指導に当たるもので、蕃書調所の中でも優秀な人物に任せられ、教授の手伝いや補佐もしていた。入門者はオランダ語の初心者がほとんどで、則良が受け持っていたのは約三十人で、個人指導を基本としていたようである。先ほど触れた西周も則良と同年、1857年（安政4年）に蕃書調所に教授手伝並出役になっているが、則良より上位の職で、教授職に準ずるもので翻訳が主な業務であるが、素読及び会読の指導にも当たっていた。英語が重視されてきた時期でもあり、早晚、英語を蕃書調所で英語が正課になることが予定されていたと考えられ、西が採用されたのは中浜万次郎から英語の手ほどきを受けていたことが考慮されたに違いない。西の自叙伝では以下のように述べている。⁸⁾

此年冬頃先師ノ命ニテ中浜万次郎ニ就テ英文典ノ呼法ヲ学ヒ専ラ英書ヲ読ム、師ノ所ニ和蘭英対訳字書ホルトロッパアリ、専ラ此字書ノ力ニ依ル

次に長崎海軍伝習所について述べる。則良は蕃書調所句読教授方出役となったが、その数か月後には長崎海軍伝習所の伝習生となり、約2年間、海軍諸術について学ぶことになった。幕府に国防意識が益々高まり、それを

担う人材養成が急務となっていたからである。長崎海軍伝習所は1855年（安政2年）に長崎西役所内に開設され、榎本武揚も学んでいた。幕府への批判や尊王攘夷思想が広まる前であったため、長崎海軍伝習所には、幕臣だけでなく各藩から有志が集まっていた。

長崎海軍伝習所は、幕府が海軍創設の準備として海軍士官を養成する目的で創られたわけであるが、創設の発端は、1853年（嘉永6年）にペリーが初めて江戸湾に姿を見せた後、幕府が出島のオランダ商館に、武器、軍艦、西洋工業技術の入手の話を持ち掛けたことによる。その頃の出島商館領事であったドンケル・クルチウス（Donkel Curtius）は日本滞在中も長く日本の国情を理解していたので、幕府の要望もよく承知していたと思われる。⁹⁾ また、オランダ海軍大佐ヘラルド・ファビウス（Gerhardus Fabius）は、来日経験が数回あり、オランダ政府と幕府の調整役を務めていた人物で、彼らの協力によって長崎海軍伝習所が始まったと言ってよいであろう。1855年（安政2年）にファビウスはオランダ政府から幕府への献呈品として、外輪蒸気船スムービング号（Soembing）を引き渡し、これによって長崎海軍伝習所が実質的に始まったのである。伝習生はすでに軍艦についての知識は持っていたが、ここに初めて実物の軍艦をとおして実習することができるようになったのである。

幕府はスムービング号を観光丸と命名し、練習艦とした。乗組員艦長海軍大尉ペルス・レイケン（Pels Rycken）他21名がオランダから招聘され、航海、造船、測量、船具、砲術、機関、数学、操縦等の学科が授けられた。また実習用として大量の技術書及び模型、工業製品、近代的軍艦が持ち込まれた。このような大々的な事業が実現したのは、依然として日蘭関係が良好であったこと、そして幕府の力の入れようが凄まじかったためである。軍艦は、ヤバン号（咸臨丸）、エド号（朝陽丸）及びナガサキ号（電流丸）で、スクリュー推進装置及び蒸気機関を備えた最新式スクーナー船（schooner）であった。

則良は主にオランダ海軍将校ウィッヘルス（Jhr. H.O. Wichers）等から学び、レイケン海軍大尉の講義を受けることもあった。はたして則良たちはどの程度講義を理解していたかであるが、この時点での則良のオランダ語力では限界があったと想像される。教授方法は、受け持ちの教師がそれぞれの専門を講義すると、オランダ通詞がそれを訳して聞かせるという具合であったためである。通詞は堀達之助、本木昌造、森山栄之助等で、当時を代表する通詞であった。しかし、オランダ語が堪能な通詞といえども日本には存在しない近代的な事物も多々あったため、翻訳するのに困難があったに違いない。このような状況であったので、則良にとって講義の内容を理解することは、さぞかし苦労があったと想像されるが、講義と並行して練習艦の咸臨丸を使って実習が行われていたので、講義では分からないことも実体験をとおして補えたのではないと思われる。また海軍教育班長であ

り実習教師であったカッテンデーキ（Kattendyke）から五島列島、対馬、鹿児島などを経る航海訓練を受けていたときに島津斉彬と面会したことがあり、その様子を則良は以下のように述べている。¹⁰⁾

艦は進んで鹿児島港に入った。鹿児島では島津公は磯の別邸に一同を招かれ丁重は饗宴を催され、私達も初めて斉彬公に御目に掛かり、電信機や銃砲製作所なども拝見したことを今でも覚えている。

斉彬との出会いは思いもよらなかったことであろうが、何より薩摩藩の西洋技術の導入の速さに則良は衝撃を受けたに違いない。

さらにもう一つ重要な事実を述べておきたい。実は、長崎西役所内には、1857年（安政4年）に洋語伝習所も併設され、蕃書調所よりいち早く英語学習が行われていたのである。カッテンディーキが「ヴィッヘルス君は長崎奉行の懇望に従い、町の少年に英語を教えていた」と記していることからすると、則良もウィッヘルスから英語を習い始めていたと推測できる。¹¹⁾

ところが1859年（安政6年）に長崎海軍伝習所が閉鎖されることになり江戸に戻るようになった。1858年に日蘭修好通商条約が調印されたが、幕府はオランダより米国との関係を重視し始めたことも一因であろう。長崎海軍伝習所でのオランダ海軍の教師は評判が良かったにも関わらずである。2年ほどの短期間であったが、実体験をとおして学ぶことができたことは則良にとって貴重な機会であったことは言うまでもないが、精神面においても強烈な影響を与えたと考えられる。半藤一利は、こうした経験を持った当時の若者について三つのことを指摘している。一つは、国民国家として世界の中の日本という自覚をもったこと。二つ目は、西洋の科学的・合理的な考え方の必要性。三つめは身分制度や封建制度の矛盾である。¹²⁾ このように長崎海軍伝習所で西洋の文物に接した経験は、則良の将来展望において人生の重大なターニングポイントになったと思われる。

4. 遣米使節

1858年（安政5年）に幕府は米国と日米修好通商条約を締結した後、条約の正式発効に必要な批准を行うため日本から使節団を派遣することになった。1860年（万延元年）、使節団は米国の軍艦ポーハタン号（Powhatan）でワシントンへ出発したが、万が一の場合に備えて護衛船としてオランダから購入した咸臨丸を同行させることになり、その乗組士官の一人に則良が抜擢され、以下の辞令が出た。¹³⁾

申渡 今般亜墨利加国へ別船御仕立被差出候ニ乗組御用申渡 入念可被相勤候

その他、木村撰津守（御軍艦奉行）、勝麟太郎（御軍艦組頭取）、中浜万次郎（通弁主務）、福澤諭吉（木村撰津守従者）等も乗船していた。則良の主な任務は測量であった。則良は長崎海軍伝習所から蕃書調所に戻り、句読教授方から御軍艦操練所教授方手伝出役に転じていたので、おそらく御軍艦操練所の総督であった木村撰津守の推薦があったと思われる。さらに則良に白羽の矢が立ったのは、咸臨丸は則良が長崎海軍伝習所で実習用として使っていた軍艦であったこともその理由であろう。咸臨丸の乗組員は96名で、その中に若干米国人がいたが、日本人が主導して軍艦を操縦し渡米を実現できたのは、軍艦の性能の高さにもよるであろうが、それを操縦する日本人の技術の高さも見過ごしてはならない。則良等の一行はサンフランシスコに到着して、わずか20日足らず米国に滞在しただけであったが、則良にとって海外渡航は新たな時代への幕開けの瞬間を見る思いであったであろう。福澤諭吉が当地でウェブスターの英語辞書を携えて帰国した話はよく知られているが、同行した則良も英学の必要性をより一層身近に感じたことであろう。幕府は、則良が米国への渡航の任務を滞りなく果たしたことに対して以下のような論功行賞を与えた。¹⁴⁾

万延元年申歳十二月二日御殿焚火之間於御廊下両奉行
左之通申渡
申渡 赤松大三郎
銀 参拾枚 時服 式
亜墨利加国へ為御用罷越骨折候ニ付為御褒美被下候
右対馬守殿被仰渡候間申渡候

申渡 赤松大三郎
銀 参拾枚
亜墨利加国へ御軍艦被差遣候義ハ御国初以来初而之事
ニ候処 数千里ノ航海無滞御用相勤骨折候ニ付別段為
御褒美被下候
右対馬守殿被仰渡候ニ付申渡候

長崎海軍伝習所で培ってきた成果を発揮することができたとともに、様々な状況にも対応できる則良の実務能力の高さがうかがえる。

5. オランダ留学

米国から帰国後、則良は再び軍艦操練伝習所出役として勤務していたのであるが、海軍の柱石となる人物養成のためオランダへ留学生として派遣されることになった。咸臨丸で渡航した功績、軍艦操練伝習所での実績等が評価されたことは明らかである。当初は米国へ留学生として派遣される予定であったが、米国の南北戦争が始まったことで中止となり、オランダに変更されたのである。もっともオランダは幕府が軍艦建造を依頼していた国で

もあり、海軍について学ぶには支障はなかった。結果的にはこの変更は日本及び留学生にとって、約250年続いた日蘭交流が築き上げてきた遺産による恩恵は有益であったと思う。確かに国内では蘭学から英学へ関心が移り始めていたところで、米国留学が予定通り行われていたならば、則良の英語力も高まり、日本における英学がもう少し早く盛んになっていたかも知れない。しかし、オランダ語が上達してきた則良にとって、たとえ英語も学び始めていたとはいえ、米国留学でどれだけのものが吸収できたかは疑問であり、積み上げてきたオランダ語力を定着させたことが英学修養にとっても結果的に良かったのではないと思われる。

オランダ留学には則良を含め、総勢9名が選抜された。留学生の顔ぶれは内田恒次郎、榎本釜次郎、澤太郎左衛門、赤松大三郎、田口俊平、津田真一郎、西周助、伊東玄伯、林研海であった。内田、榎本、澤、赤松、田口は海軍諸術の研究、津田は法学、西は思想・哲学の研究、伊東、林は医学の研究を目的としていた。

9名の留学生は1863年（文久3年）にオランダに到着すると、オランダ政府から世話役を委嘱されたホフマン（Johann Joseph Hoffmann）に迎えられた。ドイツ人のホフマンは当時の欧米世界における中国・日本学の碩学でライデン大学の日本学講座初代正教授であった。¹⁵⁾ オランダ留学生が多くの収穫を得て帰国できたのは、ホフマンに負うところが極めて多かったと言ってよいであろう。ホフマンは来日経験のあるシーボルトとの出会いによって日本学に目が開かれた人物で、シーボルトから日本語の手ほどきを受けたが、生涯一度も日本の地を踏むことなく独学で日本語を習得した天才であった。ホフマンは後に『和漢音釈書言字考節用集』『和訓栞』『雅言集覧』等の資料を使用して1868年に『日本文典』（Japansche Spraakleer）を出版した。これは当時の欧米人による日本語学の最高峰と称された。

ホフマンはロッテルダムで則良等一行を迎え、日本語とオランダ語を交えて談話を行った。ホフマンは文献をとおして日本語を学んでいたので、文章の読み書き能力は極めて高かったが、喋るのは多少不得手であったようである。則良等は直ちにロッテルダムからホフマンの住むライデンへと汽車に乗るのであるが、実物の汽車を見るのも乗るのもこの時が初めてで、その驚きは想像に難くない。ホフマンは日本学の門弟を紹介し、彼らとともに則良等にオランダ語の学習を徹底して行なった。一方、ホフマンらにとっても、日本語を学ぶ絶好のチャンスであったはずで、何よりホフマンが『日本文典』を刊行できたのは、優秀な日本人の留学生から日本語を学び、協力を得ていたことを忘れてはならない。

ライデンに留まっていた留学生9名は、修学に応じて分散していった。西と津田はライデンに残りオランダ語・数学・法学・経済を学ぶことになった。その他はハーグに移ることになったが、引き続きオランダ語の習得が中

心であったが、則良はポンペ (Pompe van Meerdervoort) の下で理学・化学・窮理学の講義を受けた。則良は坪井信良からオランダ語を学んでいたの、書籍を読んで理解することは、ある程度はできていたようだが、ホフマンらに正しい発音を習得するよう指導を受けていた。則良は日本でオランダ語の母語話者から指導を受けたことがなかったの、発音や会話が不得手なことはやむを得ないことであった。しかし、則良はオランダ語の構造をよく理解していたことと年齢が若かったこともあり上達が速かったようである。現在の英語教育では文法が軽視される傾向があるが、文法をしっかり身に付けていれば会話の上達に極めて有効であることを、則良の例でも証明している。また、則良等一行が居を同じくすることで、日本語を使ってしまうという弊害があるので分散して住むことになり、則良は時計技師の所に下宿することになった。則良の下宿した家族は大変親切で、しかもオランダの社会・歴史・科学についても色々と話を聞くことができ、日常的にオランダ語の環境の中に身を置くことができたのは幸いであった。また、ホフマンのはからいで、社交の場でのオランダ語の会話の練習を積むことも肝要であるとのことで、国会議員、大学教授等といった知識階級の人との交流の機会を得ることもできた。¹⁶⁾

則良はオランダ留学中に、幕府がオランダに注文した軍艦開陽丸の建造状況を視察するためにドルトレクトに滞在した。ドルトレクトは造船業で栄えていたところで、この機会にいくつかの造船所に通い建造の様子を見学することができた。そして何よりも則良にとって幸運であったのは、著名な造船学者チーデマン (Tiedemann) との出会いであった。則良にとって本格的に造船学を学ぶ機会であったと言ってよいであろう。文献をもとに、学んだことを実際に確かめることができ、また様々な疑問をチーデマンや技師たちに質問することができたのである。さらに則良は、英国の造船技術の進歩が著しいことも知り、この機会に英書を参照することが多くなったということである。英語については、長崎海軍伝習所で学ぶ機会があったが、恐らくそれほど心得ていたわけではないであろう。しかし、則良のオランダ語の基礎がしっかりしていたことや、オランダ語と英語が近い言語であるという点で英語の習得も比較的早かったと推測できる。こうして、オランダ留学で多くのことを学び、1868年(慶應4年)に帰国の途に就いた。英語修養については次のところで詳しく述べる。¹⁷⁾

6. ホフマンとの出会いと英語修養

ここでオランダ留学をとおして則良の英語とのかかわりについて見てみたい。則良のオランダ語は順調に上達し、なおかつ自然科学、造船学等の専門的分野においても造詣を深くし成果を上げてきたことは明らかである。それに加えて特筆すべきことは英書にも目を通すように

なり、英語との接点も増えていったことである。則良は実はドルトレクトに滞在中に榎本武揚とともに一ヶ月ほど英国を視察に行っているのである。武揚は日本にいるときからすでに英語を学んでいて会話の方もかなりできたようである。一方、則良もシェフィールドやリバプールの造船所や機械等の工場、鉱山を見学したように、日常の用をこなす程度の英語力がついていたと思われるのである。

しかし、オランダ留学中に英語に触れることは、何か特別な要因がない限り難しいことである。ここで再び注目したいのがホフマンの存在である。ホフマンについては先述したように、当時の欧米社会における日本学の泰斗であり、『日本文典』を刊行し、その後の欧米における日本学の礎を築いた人物である。この『日本文典』はあまりにも有名であるため、ホフマン=『日本文典』という構図が出来上がってしまっているため、ホフマンの他の業績には目が及ばないことが多い。ところが、オランダ留学中に則良が使っていた推測される英語教材があることが分かった。その教材とは、*Winkelgesprekken in het Hollandsch, Engerisch en Japansch* で、1861年にホフマンによってオランダと英国で出版された蘭・英・和の3ヶ国語商用対話集である。同書は本木昌造の『蘭英和対話集』を底本として編集されているが、構成・内容ともかなり質的な違いがあり、さらにホフマンはローマ字表記表も掲載している。¹⁸⁾ 則良が1862年(文久2年)にオランダに到着した一年前に同書が発行されているので、この教材をホフマンから渡され、少しずつ英語に触れていった可能性は極めて高い。則良等の世話役であったホフマンが同書をオランダ語だけでなく英語の学習にも使い、則良も自ら進んで学んでいったことは間違いないであろう。則良はオランダ語の習得を第一に取組んでいたことは言うまでもないが、英語にも高い関心を持っていたので、オランダ語と日本語に併記されている英語に目を奪われたことは想像に難くない。同書及びホフマンとの出会いは蘭学と同様に英学に思いを募らせていた則良にとってまさに僥倖であったに違いない。さらに則良に幸運であったのは、本木昌造の『蘭英和対話集』に比べ、スペリング、語彙、英文に修正や改訂が施され質が向上していたことである。例えばスペリングでは Wellcome を Welcome に修正され、語彙は格調高くなっていて、At what price will you make …? が At what price will you furnish …? と改められている。英文も What will you buy? から What do you wish to buy? とフォーマルな表現になっている。

Winkelgesprekken in het Hollandsch, Engerisch en Japansch は、長崎や横浜に外国人居留地ができ、日本にやってきた欧米人や日本に関心または日本語が必要な欧米人のために刊行されたものであったが、則良のようにオランダの地で英語を習得しようとしていたものにとっても最良の英語教材となっていたと考えられる。

オランダ留学によっても英学修養の道も開かれたわけである。

7. 帰国後の則良－沼津兵学校・海軍兵学校

則良が帰国したころは大政奉還、幕府崩壊と激動の時であった。幕府が倒れると徳川家は静岡藩の一大名となり、幕臣であった則良も徳川に縁のある遠州見附（現磐田市）に移る予定でいた。しかし、徳川家の軍事参謀であった江原素六の建議で1869年（明治2年）に沼津兵学校が創設されると、そこで西周とともに教鞭をとることになった。則良としても米国渡航やオランダ留学などの機会を与えてくれた徳川家に恩義を当然感じていたことであろう。オランダ語が堪能で、造船学を学んだことがその理由であるが、オランダ留学をとおして英学にも通じているところが評価されたに違いない。

沼津兵学校の教授陣は、西や赤松等のように蕃所調所（後の開成所）、長崎海軍伝習所といった教育・研究機関で教育を受けたり教鞭を執ったり、または欧米諸国に留学経験を持ったことがあり、蘭学、英学、仏学等において当代一級の知識人たちであった。沼津兵学校は、時代の趨勢で教育に近代科学、特に蘭学から英学、仏学を重視する方向に転換していた。英学・仏学関係では「会話」「文典」「万国地理」「窮理」「天文」「万国史」「経済説」等の科目の他、「数学」「器械学」「図画」「乗馬」「鉄砲打方」「操練」が用意されていた。則良は、一等教授方として招かれ得意とする造船学を活かして「数学」「器械学」等を教えたものと思われる。¹⁹⁾

しかし、1870年（明治3年）には明治政府の命令により兵部省に出仕し、後に日本海軍の原点である海軍兵学校（後の海軍兵学校）教授となった。咸臨丸で米国と一緒に渡航した勝海舟から、新政府に仕えて新しい明治国家のためにこれまで蓄えた知識を役立ててほしいとの要請があったからである。沼津兵学校は陸軍養成が主な目的であったのに対して、海軍兵学校は海軍養成を目的としていたので、則良は自身の専門を一層活かすことができたことであろう。

8. おわりに

今回、赤松範一編注「赤松則良半生談－幕末オランダ留学の記録」（平凡社、1989年）を探りながら則良と蘭学そして英学への接点について調査した。これによって概要はつかめたと思っているが、二次的資料であるため深く入ることができなかった。今後は「国立国会図書館デジタルコレクション」の原本を充分読みこなし、則良の蘭学・英学修養の詳細について調査を進めたい。しかし、この段階においても則良の蘭学・英学修養が現在の英語教育に示唆している点についていくつか挙げる事ができると思う。

1. 英語を学ぶ前提として母語や基礎学力を定着させる。（読み書きそろばん）
2. よき指導者との出会いが英語の上達を左右する。（坪井信良、ホフマン）
3. 素読等をおして英語に慣れ親しむ訓練を行なう。（句読、蕃書調所、長崎海軍伝習、オランダ留学）
4. 文法書等によって日本語とは違う英語のルールを認識する。（*Winkelgesprekken in het Hollandisch, Engreerisch en Japansch*）
5. 英語を学ぶ目的を持ち、切磋琢磨、刺激を与え合うことができる仲間がいる。（句読、蕃書調所、長崎海軍伝習、オランダ留学）

こうした則良が行ってきた蘭学・英学修養は、基本的に現在の日本の英語学習にも当てはまると思われる。しかしながら昨今の英語学習は、これまでとは様子が異なってきたことは誰の目にも明らかである。良い傾向と思われるのは、上記の5のように協同学習が教育現場で次第に取り入れられていることであろう。一方、疑問を感じるののは、上記の1.3.4においてである。1については言えば早期教育である。頭から否定するわけではないが、それを受ける人の特別な才能や極めて精密な教育環境が整っていない限り母語も英語も中途半端になってしまい、思考や感性に影響がでてくるのではないだろうか。3.4については、英語を素読し、何十回となく反復練習するとともに異言語と格闘する習慣を軽視している点である。英語は日本語とは対極をなす言語であるので感覚的に慣れることと理屈でしっかりと認識しておく必要がある。則良の蘭学・英学修養について見てきたが、時代が大きく変わった現代においても基本はさほど変わるものではなく、歴史から学ぶところは多々あると思う。

注

- 1) 赤松範一編注『赤松則良半生談－幕末オランダ留学の記録』（平凡社、1989年）は、同書の「凡例」及び「はじめに」に記載されているように、赤松則良の談話、日記等の資料を参考にして則良の長男、範一が整理し、その後、則良の外孫である宮崎堯、何初彦、色部義明が協力して編集したものである。内容は則良の少年時代からオランダ留学から帰国するまでの約20年間のことである。
- 2) 同上書、273-277頁。
- 3) F.L.ホークス編纂『ペリー提督日本遠征記』（角川ソフィア文庫 2014）を参照。原文の題は、Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan : performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C.Perry, United States Navy, by order of the Government of the United States, compiled from the original notes and

journals of Commodore Perry and his officers, at his request, and under his supervision, by Francis L. Hawks.

- 4) 赤松範一編注『赤松則良半生談－幕末オランダ留学の記録』18頁。
- 5) 川路寛堂編術『川路聖謨之生涯』（世界文庫、1970年）、429-432頁。
- 6) ここに所収の文言は、赤松範一編注『赤松則良半生談－幕末オランダ留学の記録』19頁からの引用であるが、原本は蕃書調所の『統泰平年表』（安政三年二月）に記載されている。
- 7) 緒方洪庵の適塾で福沢諭吉や大村益次郎もこれらのテキストを使って学んでいた。
- 8) ホルトロップとは John Holtrop のことで、使っていた辞書は『英蘭・蘭英辞書』*English and Dutch dictionary; Nederduitsch en Engelsch woordenboek*, 1823-24. である。
- 9) クルチウスは自ら日蘭両国の言語研究にも従事し、1857年（安政4年）にはライデンから *Hij in 1857 schreef Proeve eener Japansche Spraakkunst, in 1861 het Fransch vertaald.* いわゆる『日本文典例証』を出版した。この書にはホフマンの注釈と増補がなされている。
- 10) 赤松範一編注『赤松則良半生談－幕末オランダ留学の記録』41頁。
- 11) カッテンディーケ著・水田信利訳『長崎海軍伝習所の日々』（東洋文庫、1964年）、181頁。
- 12) 半藤一利『幕末史』（新潮社、2021年）101-102頁。
- 13) 赤松範一編注『赤松則良半生談－幕末オランダ留学の記録』75頁。
- 14) 同上書、106-107頁。
- 15) 拙稿「蘭英和対話集 *Winkelgesprekken in het Hollandish, Engrerisch en Japansch* (1861年) 解題と様相」（『浜松大学研究論集』第18巻第2号、2005年）を参照。ホフマンについては日蘭学会編『洋学史事典』（雄松堂、1974年）に人物像について詳しく記載されている。また、ホフマンの文法論については飯田晴巳『明治を生きる群像』（おうふう、2002年）に簡潔に解説されている。
- 16) 赤松範一編注『赤松則良半生談－幕末オランダ留学の記録』158-170頁。
- 17) 同上書、171-173頁。
- 18) 拙稿「和英商賣対話集 解題と様相」（『浜松大学研究論集』第17巻第2号、2004年）を参照。
- 19) 沼津市明治史料館編『沼津兵学校』（沼津市明治史料館、1998年）を参照。